

1 節 「はじめに神が天と地を創造された。」

永遠の神は、歴史の始めに天地を創造されました。それは、あらゆるものの存在が偶然ではなく、むしろ目的を持っていることを語っています。しかも神は、材料なしに世界を造りました。これが神の全能の力です。神は全能ですから、私たちは重い人生の課題を、このお方の所に持っていくことができるのです。

2 節 「地は茫漠(空っぽ)として何もなく、闇が大水の面の上にあり、神の霊がその水の面を動いていた。」

造られた当初の世界は、背景も役者もない劇場のように空っぽでした。目指すゴールは、そこに命ある役者、音楽家たちを迎え、美しいものを演じさせていくことでした。ですから天地創造の過程には、これから命を迎えようという期待感があふれています。そのことを思う時に、2 節後半に「神の霊がその水の面を動いていた」というのは意味のあることだと気づきました。この世界はいのちを迎える前から、すでに慰めの聖霊の配慮の中にあつたのです。こうした神の配慮の中で、命は(そして私たちも!) この世界に生まれてきたのです。

3 節 「神は仰せられた。『光、あれ。』すると光があつた。」

命を迎える準備は「光、あれ」という御言葉で始まっていきます。神の御言葉には命を、そして人を生かす力があるからです。ですから神の言葉に聴く営みは大切です。私たちの命も、神の言葉を聴く中で毎週、新たにされているのです。

ところで、「光、あれ」と言って現れたこの光は、いったい何の光でしょう?第二コリント 4 章 6 節にヒントがありました。「『闇の中から光が輝き出よ』と言われた神が、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせるために、私たちの心を照らしてくださったのです」。この光は、人の心を照らし、神を知ることができるようにする光です。神は、創造の第一日から、人の心を照らすことを大事に考えておられたのです。

結び

神は、「闇」の覆っていた世界に「光」をもたらしました。この順序が大事なリズムになって、この世界は時を刻んでいます。創世記 1 章の時の刻み方は、「朝から夕」へと暮れていく、今の世の中と違っていません。5 節「夕があり、朝があつた。」この神の時の刻み方は、私たちの心にも語りかけて来ます。人生は暮れていくのではありません。神の御言葉を握る人生は「闇」から「光」、「夕」から「朝」に向かうのです。